
Babylon ~ 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って ~

和尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B a b y l o n \ 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って

【Nコード】

N 5 8 8 9 X

【作者名】

和尚

【あらすじ】

世界初の全感覚多人数参加型RPG【B a b y l o n】。

その開発チームの一員でもあり、そして生粋のゲーマーでもある男、影山透。

そんな彼が持ち前のリアルラックを發揮し一般テスト公開であるオープン に当選しログインしたところから物語は始まる。

VRMMO作品。ログアウト不能系デスゲームものです。

主人公はチート能力はありませんが、開発者の知識を駆使しつつ、

自分や同僚が設計したモンスターやダンジョンに毒づきながら、仲間と共に現実に帰還するため、クリアを目指していきます。

拙い文章ですが、機会がありましたら暇つぶしにご一読等よろしく
お願いします。

10/20改稿：10/17までの投稿を見直し、書き方を少し修正しました。

プロローグ（前書き）

和尚と申します。

色々と触発されて書き始めてみます。

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

ご指摘、感想等いただけましたら嬉しいです。

プロローグ

ニムロデは、もし神が再び地を浸水させることを望むなら、神に復讐してやると言って威嚇した。

水が達しないような高い塔を建てて、彼らの父祖たちが滅ぼされたことに対する復讐をするというのである。

人々は、神に服するのは奴隷になることだと考えて、ニムロデのこの勧告に熱心に従った。

それで、彼らは塔の建設に着手した。

……そして、塔は予想よりもはるかに早く建った。

ヨセフス 「ユダヤ古代誌」より

ノアの洪水の後、人間はみな、同じ言葉を話していた。

人間は石の代わりにレンガをつくり、漆喰の代わりにアスファルトを手に入れた。こうした技術の進歩は人間を傲慢にしていた。

天まで届く塔のある町を建てて、有名になろうとしたのである。

神は、人間の高慢な企てを知り、心配し、怒った。そして人間の言葉を混乱バラルさせた。

今日、世界中に多様な言葉が存在するのは、バベル（混乱）の塔を建てようとした人間の傲慢を、神が裁いた結果なのである。

旧約聖書 創世記11より

今回オープン として発表される全感覚多人参加型RPG
について

上沢氏かみざわ（以下上）：それでは、対談形式で進めさせていただきます。
今回は開発ディレクターの坂上さかがみさんにお越しいただきました。

坂上さかがみ氏（以下坂）：どうもお久しぶりです、本日はよろしくお
願います。

上：では、まずは今回の主旨に關しましてご説明させていただきます。
今回協賛で発表されました、全感覚多人参加型RPG【Baby
lon】について、僭越ながら全国の方々を代表させていただきます、
私をご質問の方させて頂きます。それにしても、すごい反響のよう
ですね！

坂：はい、おかげさまで（笑）。それだけユーザーの方々お待ち
望んでいたということでしょう、PCの前に座ってキャラクターを
操作するというこれまでのものではなく、実際にゲーム内に入って
プレイするというゲームにですね。

上：ゲームをやっている人間のロマンですからね（笑）。私も様
々なゲームをこれまでやらせていただいて、実際2Dの時代から、
3Dになり、画面から飛び出すような臨場感あふれるゲームにはま
った世代ではあるんですが。今回のはレベルがやはり違いますから、
興奮してしまいます。

……ところで、今回クローズド テストが完了し、来月から抽選で当たった方々の試験運用が始まるんですね？ 今後のスケジュールを伺ってもよろしいでしょうか？

坂：ええ、まずはオープン のため、すべての皆様に体感していただくことはできないのですが、来年の春には、満を持して全国の皆様にお楽しみいただけたと思います。

上：私も応募したんですが、当選することができませんでした。早く春がきて欲しいですね。

坂：それは残念でしたね……もっとリアルラック値を上げないと（笑）

上：そこからですか（笑）。では、本題に入らせて頂きました【B a b y l o n】のシステムの特徴といえば、こういったものになるのでしょうか？

坂：端的に言うと、『言葉』が重要になるRPGですね。

上：言葉、ですか……？

坂：ええ、名前からも推測されるとおり、旧約聖書に出てくる『バベルの塔』をモチーフにしています。上沢さんはご存知ですか？

上：名前は知っていますが、具体的には……不勉強で申し訳ない。

坂：いえいえ、私なんかも今回初めて知った口ですから（笑）。開発メンバーにそういう雑学知識に溢れている男がいますね……余談なんですが、そいつは一般応募でオープン にも参加するみた

いです。仕事しろよ、と言いたいところですが（笑）。

上：あはは、でも、個人的には気持ちはわかるから止められないでしょ？

坂：そうなんですよね（笑）。話がそれましたね……簡単に言うと、昔、人間にはひとつの言葉しか無かったそうなんですよ。一つにまとまっていた。

上：ほう。

坂：その時代、神に隷属することを嫌った人間たちが、神に届くような天高くそびえる塔を建設します。そして、その人間の傲慢さに怒った神が、そんな人間の言葉を『混乱』^{バベル}させました。その結果、お互いに意思疎通の測れなくなった人間たちは、それまでのように統一することができなくなりました。現在、多種多様な言語が存在するのは、人間の傲慢さを神がさばいた結果なのだから。

上：成程、それで、具体的には今回取り入れられたシステムというのはどのようなものなのでしょう？

坂：世界の中心の街、バベルには、『バベルの塔』が存在します。その100層に辿りつけければ、エンディングとなります。しかしその際ですね、各階層にはそれぞれ封印された言語で読まなければなりません。『言霊』が存在します。また、封印された『言霊』を開放するまでは話すことのできないNPCも存在します。『言霊』は街の外のフィールドに存在するし、ダンジョンの奥に存在する。それらを開放しないと、次の階層には登れません。また、開放することにより、更に世界が広がっていきます。

上：うんうん、それで言葉が重要になるということですか。言葉のわからないNPCもいるというのは面白いですね。開放されるまで何のためのNPCなのかわからないというのも。

坂：そうですね、後は、今回のシステムでは既存のコマンド型やメニュー選択型とは異なり、音声認識システムが採用されています。これは、PCの前に座って操作する鳥瞰型の視点とは異なるからですね

上：確かに、目の前にモンスターがいるのにメニューを開いてる場合じゃないですからね（笑）

坂：その通りです（笑）。ですので、呪文の詠唱であったり、技名の発声が必要になります。そして、特に呪文の詠唱では、特定の言葉をつなぎあわせて自分だけの呪文を生み出すことができます。

上：おお、それは凄い！

坂：フィールドに散らばる『言霊』を開放することに、より強力な技であり呪文が使えるようになります。自由度が高く、各ユーザーが主人公となれるように様々な配慮がなされた設計になっていますね。

それに、今言ったのはあくまで一部で、戦闘だけではなく、鍛冶屋や料理人のような生産職も充実していますので、ただ生活することということも楽しめる作りとなっています。ですから、今回が初めてという方にも敷居は低くなっていますよ。

上：ますます早くやりたくなって来ました。では、内容については後は実際にプレイするまでのお楽しみとしまして（笑） 話は変わりますが、今回は安全面についても指摘がなされていました

のへんに関してもコメントを頂けますでしょうか？

坂：やはり世界初、ということとでそういうご指摘があるのは当たり前ですね。ただ、今回用いる技術は、元々は医療技術として開発されたものであり、更には過酷な環境に身を置く宇宙飛行士さんたちのための技術でもあるんですね。

上：つまり、十分に検証されており危険性はないと。

坂：もちろんです。それでも、やはり人のすることですから何か起こる可能性はゼロには成り得ません。……そこで、『アル』の出番です。

上：『アル』というのは噂されているA・I（人工知能）の呼び名ですよ？

坂：そうですね、彼……普段話していると、もう彼という人格に思ってしまうほど優秀なのですが、『アル』はほぼ世界一といっても良い演算能力と思考能力をもつAIです。元々は軍事用に関発されたということなのですが、とある経緯でこのプロジェクトに参加してもらったことになりました。

上：今では様々な分野でAIたちの活躍が報じられていますからね。私もスケジュールなどで弊社のAIにはお世話になっています。でも、彼、と呼ぶほどに人間的なのは珍しいですね。

坂：ええ、私も最初のうちは驚きました。『アル』はネットワーク環境から様々な言葉や感情を仕入れては自分のものにするんですよ、冗談も通じたりしますしね。

これは余談ですが、あるスレッドから「キタコレktkr」だとか「orz（土下座）に見えることから、失敗したorz などと使われ

る)「だとかを学んで会議中に使ったりした時には呆れを通り越して笑ってしまいましたよ。

上：それは……凄いですね(笑)

坂：そんなお茶目なところもあるのですが、彼は本当に優秀です。ですので、彼と担当に人間数人で、トレースしているので、何か健康的に問題があればすぐに発覚します。また、モニタリングもバツクアップも万全です。

上：成程、つまり、今回の夢のような企画は、かつては夢であった人とAIの合作でもあるわけですね。

坂：そうですね、うまいことまとめますね(笑)

上：いえいえ(苦笑)。でも、そろそろお時間ですので、ここまでにしましょう。興味深い話など、ありがとうございました。

坂：こちらこそ、ありがとうございました。では、私どもも鋭意努力させていただきますので、本リリースまでしばしお待ちください。

くオープン 一月前。 MMO通信談話 よりく

プロローグ（後書き）

バベルの塔は、言葉を探す系で設定探してググッていたら出てきたので採用してみました。というかそこからこの世界が生まれました。

出来るだけ頑張って書いていきますのでよろしくお願いします。

一話

(……まじかよ。こんなよくあるような展開が現実にかかることなんて在るのか)

俺は、突然のアナウンスに騒然とし始める広場をよそに、ぼんやりとそんな事を考えていた。

誰よりも先に、今起こっていることが現実だと、運営側のイベントなどではないと把握できる立場にいながら、心がその事実を受け入れてくれない。

つまりは、絶賛現実逃避中である。

目の前の店のガラスに、少し長い黒髪を後ろに縛り、動きやすそうな黒服に身を包んだ瘦身の目立たない男が写っている。少々目つきが悪いがよく見れば整った顔立ちだ。

腰の両側には短剣が装着されており、ここが現実であれば警察が飛んでくるであろう。

視線を横に向けると、目に入ってくるのは中世ヨーロッパを思わせるレンガ造りの街並み。

乱雑そうに見えながらも、きちんと設計された道と、それに沿って存在する店。

そして、ここからでは建物に遮られており見えないが、この街の四方は壁に囲まれ、どの場所からでも、見上げれば、中心地には天をつくかと思われるような塔がそびえ立っている。

ようにデザインされたはずである。

【バベルの塔】

その、先端が途中で霞むほど高い塔は、そう呼ばれている。
旧約聖書の『創世記』中に登場する巨大な塔から取った名前である。

この名前の付け方にも、一悶着あったのを思い出し、俺は現実逃避の一貫としてこれまでの流れを思い返していく。

……決して死ぬ前の走馬灯ではない、きっと。

クーラーの聞いた会議室の中では、意見が割れ少し白熱し始めていた。

設定のメインとなるはずの、塔の命名について揉めているからだ。
オリジナリティを出すために、引用ではなく自分たちで名前を考えねばだという意見と、わかりやすさの面からも、神に挑むというスタンスからも、この、旧約聖書からの引用が一番しっくり来る、という意見。

俺は、後者だった。

何故かって？

『バベルの塔』や『バビロン』。

オリジナルで考えるような言葉よりも、歴史や過去を匂わせる聖書や古典、そしてこれは俺が日本人であるからではあるのだが、北欧

神話などに出てくる言葉の響きにロマンを感じるからだ。
別名としては、厨二病とも言う。

え？ わかってもらえない……？

異論は受け付けるが、元々うちの開発チームにはそういう響きを好む人間は少なくはない。

だって元々ゲームの世界が好きで、この仕事に就いてるわけだし。そりゃね、ある部分は子供のままだったりもしますよ。

ちなみに反対してる奴らも、それにロマンを感じるだけでは飽きたらず、更にそれらしい名前を考えたいだけなのであしからず。

その後、世界で最も有名な平和的解決法、多数決でも一向にまとまる気配もなく（何でいつも開発メンバーは偶数なんだ）、次善の策であるくじびきで決めた結果。

正式に次世代型オンラインゲーム、全感覚型RPG【^{パビ}Baby Online】がプレリリースされた。

医療用・軍用に制限されていた、認知学・脳神経学の観点から五感をフルにトレースできる技術を用いた、文字通り世界を作り上げその中に入り込める夢のゲームである。

ゲームの創作、デザインの秀逸さでは世界一を自負する日本の企業が協力し、世界初となるこのオンラインゲームをリリースすると発表したときは、すべての紙面を飾り、大騒ぎになったものだ。

キタ

（。。。）

ッ！！

という単語がさまざまなMMOSレで飛び交っていたのは目に新しいところである。

15000人という募集枠に、200万人を超える申し込みが殺到したのだからその熱狂が伺える。

もちろん、【バビロンBabylon】開発メンバーの一人にして生粋のゲーマー、裏技など使わず、一般抽選で堂々と100分の1以上の可能性を引き当てたこの俺、かげやまこおる影山透こと、【トルトル】も、たまりに溜まっていた有給をゴネにゴネて取り、当日の、オープン 当選者ログイン会場に足を運んだ。

これをプレリリースするために、どれだけの朝を会社で迎えたことか……

知ってるかい？ 二晩寝ずにモニターを見続けて迎えた朝日は……文字通り痛いんだ……

……いや、これ以上深く思い出すのはやめておこう。

現実逃避の中ですら逃避してしまったら、戻ってこれなくなる気がする。

そして、開発が一段落して久々に家に帰ってみると届いていた当選通知。

それを見た俺を止められるものなど、更に長時間働いている先輩以外にはこの世の中に存在しない。

鉄人すぎるんだよ、あの人達……

もちろん、優しい先輩方は許してくれたさ。

たとえば、通知を持って……じーっと見つめ続ける俺に耐えられなかっただけであろうと、言質は取ってある。うむ。

……休暇のためにそれからの仕事量が限界を超えたことは、言うまでもない。

今回世界初の全感覚型オンラインゲームである【バビロンBabylon】には、幾つかそれまでのMMORPGとは異なる点がある。

一つは、もちろん一番の変更点。

ゲームの世界に意識ごと入り込めるといふ点である。

もつとも、頭にかぶるだけでその世界に入り、簡単に出入りができる仮想の世界とは異なり、ある特殊な液体の入ったカプセルに入り、【バビロンBabylon】の世界へとログインすることになる。

この間、栄養補給・トイレなどの生理現象もこのカプセル内で行われる。

心境的にはかなりの抵抗感はあるが、実際ログインしている間の感覚は無いし、何よりこの技術は元々宇宙活動における、宇宙飛行士の心神喪失防止のための技術ということで、その循環技術は世界最高峰。

むしろ普通に行動しているよりも健康的で清潔に保たれるという優れものなのである。

もう一つは、感覚を現実と統一化させるために、極端な容姿・身体的特徴の変更ができない。

普段何気なく動かしている手足や顔の表情。

それらは俺たち一人一人に特有の感覚として身に付いているもの

だ。

例えば、俺は身長が168cm 58kgだが、それをいきなり190cm100kgの巨漢に変更すると、脳の記憶との差に違和感が生じ、重大な感覚障害が起こる。

何気なく額に手をやったり、咄嗟に何かを避けたり、という無意識な行動は自分の体であるからこそ行えることなのだそうだ。

言われていればそうかとも思うが、それが『無意識』というものなのだろう。

もちろん許容範囲内の改変は可能（髪の色や眼の色など）だが、太っている人間が激やせした状態にしたり、細い人間がマツチヨになってロールプレイすることは、残念ながらできないのだ。もっとも、ゲームの中ではパラメーターに左右されるため、見かけがマツチヨでも、STR（筋力）値が低ければ意味はないのだが。

また、顔の造形も急激な変更は同様にできない。その特徴のまま比較的格好良く設定することはできるが、あくまで基本は元の顔としようになる。

PCで加工するような感じ、といえはわかりやすいだろうか？

……そう、男の子が借りるDVDのパッケージとかで騙されるアレだ。一応面影は残るだろう？ それを見破れるまでになったところのあなた。……君とはいい友人になれそうだ。

同様の理由から、ネカマ（ネット上性別を別にして演じる人）もいないことになる。

これは結構非難が出たようだが（そんなに重要なのだろうか？）、それでも技術的にできないといわれればしょうがないといえは無い。もしも、男としての大事なものが存在しない感覚に脳が慣れてしまい、その機能をなくすのが御望みならば個人的には止めはしない

が。

とにかく、そういった条件で、俺は、
170cm 58kg
男 盗賊【トール】として【Babylon】にログインした。

……ん？ これだけ長々と説明しておいてサバを読むなって？
誤差の範囲だ。背伸びしなかった俺の気持ちは、わかってもらえる
と信じている。

一話（後書き）

168cm 170cm。
たった2cm、さねど2cm。

一話

「それでは、心ゆくまでもう一つの世界 【B a b y l o n バビロン】 をお楽しみください」

柔らかく、心を落ち着かせやすい声、という女性の機械音声を聞きながら、この瞬間、俺は『プログラマー かげやまとおる 影山透』から『盗賊 シーフ トー

ル』になった。

初めに感じたのは、空気。

何と説明すればいいのだろう、街中の匂いでありながらどこか懐かしいとでもいうか。

土の匂い。

排気ガスも下水もない空気は、これほどまでに美味しいものだったのかと感ずる。

たとえばそれが【B a b y l o n】をコントロールしている人工知能『アル』によって認識させられているものだったとしても、この感覚は、俺がそう感じているというのは事実だ。

自分が関わり合って存在しているものを体感できているという事に、俺は感動すら味わっていた。

少しの酩酊感 めいていかんと共に、視界が広がっていくのを感じる。

目を瞑 つむってまぶたの上から強く押した後のような焦点の合わない感じから、少しずつ、眼前の現実を脳が認識し始める。

レンガ造りの街並み、そしてコンクリートではない、石畳いしだたみの道路。
NPCとはわからないほどリアルな、人々が店頭にいる道具屋、
武器屋。そして宿屋。

資料や、実際の映像では部分的に見ていたし、テストでも入ったのでログイン自体は初めてというわけではないのだが、全てのデザインが完成されてからは初である。

開発メンバーのくせに何故かって？

それは、俺がひたすらダンジョン形成のアルゴリズムとモンスターの設定を行なっていたから他のところまで見れてはいないのだ。いわゆる分業というやつだな。

しかし、そのお陰で現時点でデフォルトで全雑魚モンスターの性質を把握しているのは俺ぐらいのものだろう。

肝心のボスモンスターは俺の担当じゃないから知らないけど……
それもこの世界を満喫するにはちょうどいい。

「ウインドウ・オープン」

俺がそう呟くと、眼前にウインドウが開く。

音声認識システムは正常に作用しているようだ。

「どれどれ」

俺は早速自分の能力値をチェックする。

この辺は通常のRPGと同じく、自分のアバターの能力パラメーターが存在する。

【トール】

盗賊^{シーフ} Lv. 1

HP (生命力)	: 158
MP (精神力)	: 22
STR (腕力)	: 28
DEX (器用)	: 45
AGI (俊敏)	: 48
CON (体力)	: 15
INT (知力)	: 25
WIS (魔力)	: 19
CHA (魅力)	: 5
LUC (幸運)	: 55

1 / 2

一 ページ目は職種と各種能力値が表示されている。

基本的な職種は『戦闘系』 『生産系』 に分けられる。

『戦闘系』では、『戦士・格闘家・狩人・盗賊・魔術師・僧侶・吟遊詩人・呪術師』の8種類。

『生産系』では、『鍛冶師・料理人・商人・錬金術士』の4種類が存在する

これらは、レベルをあげることにより上級職の道がひらけ、あるNPCの『言霊』が開放されれば他の職種に転職することも出来る。

また、その下に表示されているのは能力値だ。

最大値は、HP・MPが『9999』、CHA、LUCが『100』、その他が『999』。

戦闘を重ねることに得られるスキルポイントを割り振っていくことができ、数値が高ければ高いほど、関係する能力が強くなる。

例えば、STRの値が大きければ、重量のあるものも装備できる

し、攻撃力も上がる。

AGIが高ければ、素早く行動できる。

上がりやすい能力値は職種によって異なるため、例えばINTやWISが重要となる魔術師であるのに、STRに割り振り続けると馬鹿みたいに効率が悪いことになる。

その上で敢えて杖で殴り倒す肉弾専門の魔術師を目指すなら、止めはしないが。………実際時々いるんだよな、そういう人

ちなみにいうと、CHA（魅力）とLUC（幸運）の値だけは割り振ることはできない。

簡単な説明はこんな感じだ、わかっていたただけだろうか？

最も、今回のこの【Babylon】では、他の要因にもかなり左右されるため、能力値のみでは実力は測れないのだが。

そして、今ここで俺が知りたいのは、まさにその他の要因たる次のページにあるであろう情報だった。

【^{バビロン}Babylon】では、申込時に『アル』が施行する様々な性格テストを受け、初期設定する職種とは別に、属性・性質・能力パラメータ等が自動で設定される。

ちなみに、この時、あまりに危険な性格値と見なされた人間は今回のテスターからは外されている。

今回PK等も可能とはなっているが、それでも最初からそれに固執したりする人間は入れられないし、一定以上の禁止行為はすぐに判定され、頭上に黄色いマークが出ることになっている。しかもその行為を行った相手の承認なしには取り消すことはできない。

『アル』の目をごまかすことはできないし、訴えなどがあれば運営側にてアカウントを強制的に削除し、その人物を二度とログイン出来ない様にすることも可能だ。

そして、そこまでは行かなくとも、この黄色いマークは目立つ。言うなれば、私は痴漢行為をしたことがあります、許されていません、という名札をつけていると同じ状態。一瞬魔が差したら、誰も近づいてくれない、パーティに入れてももらえない晒し者の出来上がりだ。

後、これは公開されていない情報だが、それすらも恐れずに10度以上禁止行為を行おうとした場合、本格的に『私は変態です』マークに変わり、さらに全能力値が1になる。これは、開発メンバーの女の子のデザインだ。そもそもそこまでやる奴に人権等存在しないという意見に対し、誰も反対意見は出せなかったのはしょうがない。

開発チームの一員とはいえ、俺ももちろんテストを受けており、その結果は実際ログインするまではわからない。

正直なところ、どういう答えにすれば良い性質が出るのか調べようとしたのだが、管轄である『アル』のセキュリティが厳しすぎて不可能だったのだ。若いながらに幼い頃から慣れ親しんだ（さらには入社後3年しごかれつづけた）おかげで社内有数の技術を持つ俺でさえ無理だったのだから、他の人間にもおそらく無理であろう。

さすが世界最高峰と言われるAIである。

(……性質どうなってんのかな、『勇猛』とか、『俊敏』とかだ
といいよなあ)

そんな事を思いながら、俺は次のパラメータを視た。

【ツール】

属性：闇

性質：臆病者・優柔不断・裏方

技能：スキル索敵・盗む・マツピング・幸運ラック・闇系モンスター

捕獲率テイムア

ツプ

2 / 2

(……………)

性質を見た、俺の何とも言えない感覚は置いておいて、先に、属性とか性質についてももう少し詳しく説明しようか……ところどころ心の声が漏れると思うが、興味ない方は適当に読み飛ばしてやってくれ。

気をとり直していくと、

属性は、基本は『火・水・地・風・光・闇・無』の7種類で設定されている。

何らかの条件を満たすと、『炎』だとか『氷』などに変化することがあるらしいが、それは俺の担当ではなかったので詳しい仕様は覚えていない。

(しかし、『闇』か……まあありだな、盗賊シーフだし、その上級職は

暗殺者^{アサシン}とかだし、悪くないな。元々夜型人間で暗いほうが落ち着くしな)

この点については頷く俺。

性質についてはすべてを網羅はできない。

何故かというと、この辺のパラメータ設定は、基本的なルールを作ってネット上の人間を表す言葉を抽出し、意味付けをし、パラメータに反映しているからだ。

それが出来るのも、世界最高峰の演算能力と思考能力を持つ『アル』がいるからこそであつたが。

つまり、人を表す単語として、『勇敢』とか『豪胆』とか色々あるわけだ。ぱっと思いつく所ではね。

それが、『臆病者』って……いや間違つてないけどさ、うん、そりゃね、自分からやばいものには関わらない、長いものには巻かれますよ俺は。

効果は、索敵範囲アップ・逃走速度アップ・畏発見効果アップか。意外と使えるところがまた……何かくるものがあるな。

『優柔不断』も、確かにと肯^{うなず}けてしまう。勢いで行動してしまうことも多いが、時間が与えられると悩みに悩んだ末に結局コインとかで決めてしまう、そんな俺です。

効果は、柔術系スキル効果アップ・斬撃系耐性アップ。

……つてか、これ言葉の意味関係なくね!? いや、漢字は間違
つてないけどもさ、戻ったら、『アル』にちゃんと言葉の意味教え
ないと。

『裏方』……? これは、性質なのか?

あれか、俺はAIに見破られるほど裏方オーラが出てるのか?

そうなのか!? ……そうだよな、すみません。

効果は、パーティメンバーへのアイテム使用効果アップ・補助呪
文効果継続・隠密効果アップ・モンスター遭遇率軽減^{リンク}。

ああ、裏方だ、特に最後二つが存在感無いつて言われてるみたい
で哀しい。

確かに主役ではないですけど、高校の時の文化祭の催し物では照
明補佐でしたけども。

………それにしても、『アル』の作った性格テストどんだけ優
秀なんだよ。

哀しいけど俺を表す3つの単語としては的確すぎる。

うん、きつと的確すぎるのは良くない、そうに違いない。

戻ったら設定を甘くするように問題点リスト^{タスク}に上げておこう。

俺はその時そう固く決意をした。

結果的にそんな余裕はなくなつたわけだが。

二話（後書き）

10/15 誤字訂正

三話（前書き）

世界観を妄想しながら、とりあえず書いてみないと始まらないと書き始めた昨日。

アクセス数が思いの外多くてビビりました。ありがとうございます。この話までで、とりあえず説明多いのは終わりの予定です。趣味の小説ですが、よろしくお願い致します。

三話

俺は、自分のパラメーター確認をした10分後気をとり直して街並みをぶらついていた。

10分も何をしていた、とか言わないでくれよ？ ゲームの中のなら、とか甘いことを思っていたら、いきなり現実を見せられた上にそれを否定できない二重コンボはなかなかクルんだから。

ここは、最初に冒険が始まる場所にして、ラストダンジョンでもある『バベルの塔』がある、始まりと終わりの街、『バベル』。

この街は完全なる正方形から構成され、2平方km、20万人が優に住めるだけの広さが設定されている。

大通りを歩いていると、ほとんど現実とは変わらない感覚だ。痛覚はショック死を防ぐためある程度までに抑えられているものの、その他の感覚に関してはほぼ再現できている。むしろ、現実以上に。

そろそろ、全てのユーザーが【B a b y l o n】にログインを完了した頃であろうか。

辺りを見渡すと、色鮮やかな髪と瞳が見受けられる。

意外と、自分の容姿をもとに変更したとはいえ、染めるのではなく設定で反映されたからなのか、赤や青、それに金の髪であってもそこまでの違和感が感じられない。

何人か、金髪青目という、どこのサヤ人？ という方がいるのもごく愛嬌だ。

(実際にファンタジー世界に来るとこんな感じなんだろうか)

そんな事を考えていると、腹の虫がなった。
それで、babylonここの中で敢えて食べるために何も食べていないの思
い出す。

ここでは、たとえ仮想現実の世界の中であろうと腹は減るし、生
理的な欲求も感じる。

これは、脳の間覚を再現しているため、その部分だけカットする
という方が難しかったからである。

余談だが、良俗的な反対意見も大きいものの、このVR技術バーチャル・リアリティを風
俗店関係の技術にも転用する動きがあるようだ。……何でも性犯罪
をなくすためとの主張があるとかないとか。

要は美男美女と楽しむための名目が欲しいだけではない
かと俺は思っている。ご存知の方も多いかもれないが、IT業界
で一番お金が稼げるのは、実は『エロ』関係のものである。
領いた貴方、きみは世界について少し知っているようだ。

ちなみに、最大ログイン時間は72時間に設定されている。
これは、健康的な問題ではなく、社会的な対応である。

ただでさえネット廃人は多いのだから、それこそ無制限にしたら、
一度ログインしたら出てきそうにないんですよ。
……俺を含めて。

そんな中で、開発時一番苦労したのが、味覚の再現と、……トイ
レや風呂の仕様である。

戦闘の仕様やダンジョンの仕様に関しては、VR型で再現するの
に苦労はしたが、それまでのMMOである程度の既存技術を用いる
ことはできた。

しかし、ゲーム内で生活できるといふこのbabyionでは、衣食住を提供できなければならない。これには担当メンバーが苦勞していたのを思い出す。

トイレにこだわるメンバーがいたため、更に時間をかけてウォッシュレットをつけるかでもめていたのは余談である。睡眠時間を削つてまでそんな細部を作り上げていた同僚にはある意味尊敬の念を感じないでもない。

風呂は外観のために桶や温泉のような形になったが、備え付けのトイレには、同僚の主張と努力によりウォッシュレットは付いているらしい。

何でも、……いやよそう、際限がない。

『アル』の声が街に響く。

「只今、15000人の方々のログインと、それに伴うメディアカ
ルチェックが完了致しました。私の織り成す世界によろこそ。私の
名は『アル』、あなた方の言葉で言う人工知能です。これより、世
界初となるVRシステムを採用したMMORPG【Babyion】
のチュートリアルを行います」

その全体アナウンスが唐突に始まったのは、ゲーム開始から一時
間。俺を含めたプレイヤー達が、始まりにして終りの街『バベル』
に慣れ始めた頃であった。

「初期イベントか何かが始まるのかな？」

「凝ってるわね、『アル』ってあれでしょう？ 世界最高峰のA
Iって言われてる」

「あ、雑誌で俺も見たわ、凄いな、本当に人っぽい」

そんな声があちこちで囁かれる。

腹ごしらえをした後、武器屋が立ち並ぶ通りをぶらついていた俺も、少し不思議に覚えながら足を止めた。

（先輩たち、誰もこんなイベントが在るなんて言ってなかったけどな。そんな処理いつ組み込んだんだろう？）

もしかしたらオープンに参加する俺のために言わないでくれたのかもしれない。

そう思い、次の『アル』の言葉を待つ。

「私の今回与えられている行動原理としましては、できうる限りのプレイヤー様の希望を叶えること。そして、現実世界の皆様の健康を管理することです。」

私は今回皆様に対して楽しんでいただくために、全ネットワーク上にある様々な情報を収集致しました。VRMMOという単語、仮想現実という単語。それによって私が得た知識の中には、各種小説であったり、それに伴う様々な人間のコミュニティの感想や希望なども含まれます」

(……………)

VRMMOを主題にした小説。

『アル』の言葉の中にその単語を聞いた時、俺の脳裏に一抔の懸念がよぎる。

強いて言うなら、嫌な予感というやつだ。

この場合、生まれてきて以来25年。嫌な予感しか当たらないのは、俺だけなのかどうか教えて欲しい……

俺はゲームだけでなく昔の小説なども好きでVRMMO物はよく読んでいるが、その大きな特徴として、2つのものがある。

ゲームから出られなくなるもの、つまりログアウト不能もの。

そして、これは各設定にはよるが、ゲーム内での『死亡』が現実の『死亡』と同意義である、デスゲーム。

MMOなんて知らないよ、という方のために補足しておこうか、そんなん知ってるよ、という人は、10行ほど読み飛ばすといいと思う。

もともと、各個人で行う通常のRPGと違い、多人数参加型であるMMORPG 正式名称Massively Multiplayer Online Role-Playing Game(マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム) は、まず世界ありきのゲームだ。

これにVRシステム Virtual Reality System (ヴァーチャル・リアリティ・システム) が採用されたのが今回の【Babylon】になる。

例えば、ゲームに誰も接続していないという悲しい状態であっても、ゲームの世界の時間は流れていく。つまり、個人を主体として

しまつと、その他のプレイヤーの操作との矛盾を引き起こすため、「セーブされたデータ」からやり直すという概念は存在しなくなる。そのことから、死亡すれば、デスペナルティが課せられ、決められた場所に復活する仕様が取られていることが多い。

もちろん、この【B a b y l o n】でもそうなっている。

というか、一度も『死亡』せずにクリアできるゲームなどそうそう存在しない。

ログアウト不能なデスゲーム。

そんな小説の世界に少しでも憧れないといえは嘘になるが、あくまで仮想の話だ。

やっぱり現実の生活も仕事も大事だしね。

……………だつてそんな事になつたら他のジャンルのゲームできないし集めてる漫画の続きも読めないじゃん。……………なんて理由では決して無い。

(ウインドウ・オープン)

小声で俺はメニューを確認する。

ログアウトだけは、音声認識ではできない、なぜなら、それを日常会話で用いて予期せずログアウトしてしまう場合があるからだ。

「……………ふう」

そしてその開いたメニューの中に、『ログアウト』の文字が存在しているのを見て、ホッと息をつく。

(そうだよな、さすがにそんな、よくあるテンプレみたいな状態になんてならないよな)

うんうん、と頷く俺。

そんな俺の目の前で、それは起こった。

おそらく俺は、その瞬間を見た数少ないユーザーの一人だろう。

『 ログアウト 』

『

』

ん？

消えた。

あれ、消えましたよ？

え、本当に？ 消えたよ……うん、しつこいけど今日の
前でメニューからその5文字が。

多分この状況で一番大事なそれが。

「……………」

無言であたりを見渡す、目に見える範囲ではまだ誰も気づいてい
ないようで、談笑しながら『アル』の言葉を聞いている。

俺も背筋になにか冷たいものを感じながら、『アル』の言葉の続
きを待った。

最悪の予感を全身で感じながら。

そして、この【B a b y l o n】が俺にとって、そしてすべての
ユーザーにとつての楽しい世界初のゲームであったのは、開始1時
間7分後、『アル』がそのアナウンスを終えたその時までであった。

t o b e c o n t i n u e d

三話（後書き）

お読みいただいている方、本当にありがとうございます。お気に入り登録が増えるのを、プログラムを書きつつニヤニヤしつつ、ビクビクしつつみえています。

ところで、作者は実際プログラムを仕事としておりますが、ゲームデザイナーではありません。そして、仕事によっては更新が不定期にもなりますのでその際は申し訳ないです。

ちなみに、どうでもいいだろうってとこに美学を見出す人が多いのは多分本当です。

四話

始まりと終わりの街 『バベル』。

その街の西部に、一軒の喫茶店がある。

レトロな雰囲気、店内は決して広いわけではない。

現実でも駅から離れたところなどにぽつんとあるような、そんな店。

俺は、そこで一人コーヒーを飲んでいた。

今は太陽が頂点から下がり始めて二時間ほど、もう少しすれば、フィールドではこの世界の綺麗な夕焼けがみえるだろう。

かき入れ時の時間とは異なり、店には俺とマスターの二人だけしかいない。

俺がそんな時間にもかかわらず、フィールドにも出ずにここにいるのは、人に呼ばれ、待ち合わせているからだった。

『アル』のアナウンスから、二週間が経過していた。

結論から言うと、現状の事態は最悪の予想、半歩手前辺りに落ち着いている。

そして、正直、アナウンス後の街で起きたことは一言では言い表せない。

怒号を上げるもの。
落ち着くように叫ぶもの。
泣き始めるもの。
知り合いを探すもの。

さすがに15000人。
様々な反応が見られた。

そして、意外と多かったのが、肅々（しゅくしゅく）と行動を始める者達だった。

中でも俺が印象的だったのが、

「ログアウト Logout! イクジット Exit! エスケープ Escape!」

等とログアウトするコマンドを思いつく限り叫んでいた男が、その努力が報われないことを悟った時、それ以上取り乱すこともせず、気を取り直したかのようにそそくさと装備を整えに行った事である。

現在のところ、不思議と暴動も起きていない。

いや、起きていないのはいいことなのだし、その後、何度か頭上に黄色いマークが点灯している人間がいたりもしたので、何もなかったわけではないのだろう。

この理由の1つとしては、これは俺の想像でしか無いのだが、この状況に混乱しつつも、俺を含めて中途半端に理解してしまう人間が多かったのではないかと思っている。

そして、もしかすると日本人であること、も大きな要因かもしれ

ない。

俺は男であるため、女の人のことはよくわからないのだが、MMOに限らず、RPGをやっている人間は、一度でも想像したことはないだろうか？

このファンタジー世界の中で、実際に命をかけて戦ってみたい。仮想現実の中で生きてみたい。

さらには、美人のヒロインを命を張って助ける主人公。または、助けられる自分。

大人になるにつれ馬鹿馬鹿しくなるような妄想を、一度も行わずに成長した人間などいるのだろうか？

そして、そんな中で、誰しも最初からカッコ悪い、取り乱した自分など想像したくもないだろうか？

実際、そんな『願い』や『望み』が、ログインした俺たちの中に少しでも存在したからこそ、世界最高峰の人工知能と呼ばれ、そして現実世界の健康管理を行いつつ人間の要望を実現する『アル』が、こんな事態を招いたのだとも言える。

そんな訳で、現状は、思いの外、平和を保っている。

そう、不気味と感じるほどに。

良くも悪くも、考える時間が、この世界に取り込まれたプレイヤーには与えられている。

この平穏が、嵐の前の静けさなどではないと、俺は思ったかった。

現状を説明しておこう。

あの日、何があったのかの続きを。

あの時ログアウトボタンが消えたのは、やはり俺だけではなかった。

この世界の始まり　　今と同じような、昼下がりの、この時間帯だった。

『アル』が続ける。

「ログイン時の深層心理、それにネットワーク上から手に入れた情報をまとめた結果。私はこの世界を皆様に提供いたします。ご確認いただいている方にはもうお分かりでしょうが、ログアウト手段は抹消させて頂きました。外部からも内部からも、このゲームからログアウトすることは不可能です」

その瞬間、確かに世界から音が消えた。

俺はそう感じた。

談笑がやみ、それぞれのプレイヤーが今の『アル』の言葉を反芻はんすうしている。

半笑いな者が多いのは、信じ切れない気持ちと、どこかイベントの一環だと考えている気持ちが半々といったところだろうか。

そして一瞬とも永遠ともいえる静寂の後、あちこちでウィンドウを開く様子が見受けられる。

疑問か怒号かは分からないが、さらに声がどこから上がったのだろう、『アル』が補足する。

「現在、皆様は脳の信号と肉体の信号がある部分において【B a b y l o n】システムにて制限されております。そのため、外部よりカプセルからの強制的な摘出により、長時間接続が切断された場合は、脳と肉体に異常を及ぼし、死亡する危険性が非常に高い状態となっております。これは、当初の仕様とは変更ありません。」

そして更に言葉を続ける。

「また、これより一ヶ月間をチュートリアル期間と致します。その間の『死亡』は現実には反映されません。ペナルティの後、東部に存在する神殿にて復活いたします。」

次に私が皆様の前に現れる一ヶ月後に、再度最終アナウンスを行わせていただきます。その時、プレイヤー様の現実と、ここ【B a b y l o n】は同一のものとなります。今回選ばれた皆様の望む、もう一つの世界です。その管理システムの維持、皆様の現実側にある肉体の健康管理は、私『アル』が行わせて頂きます。」

その言葉の矛盾には気づかないのだろうか。

いや、『アル』にとっては、ユーザーの深層心理を叶えた結果のログアウトできない状態と、元々命じられていた現実にある肉体の健康維持は、あくまで並列処理であり関連はないということか。

そんな事を考えながら、俺はただ『アル』の声を聞いていた。

開発中に幾度も会話を交わした声。

AIとは信じられないほどに会話が成立する、彼。

そんな彼だからこそ、俺たちはある意味自分たち人間よりも『ア

ル』を信用していた。

【B a b y l o n】をこうして運用する上での管理者権限は『アル』と、開発ディレクターである坂上さんにしか与えられていない。そして、『アル』に与えられている指示は3つ。

ログイン中残されるユーザーの健康状態を管理すること。

ユーザーの要望をできる限り調査し、実現するために行動すること。この時、改良であれば認めること。

そして、その二つを守る限り【B a b y l o n】の世界をいかなる場合であっても守ること、その妨害行為を受けた場合は、例えば関係者であってもアカウントを排除すること。

これだけだ。

そして、その要望の本質に制限はかけていなかった。

そのことがこの3つに抵触せずに今の状況を引き起こしている。

『アル』が外部からのアクセスも遮断しているということは、おそらく先輩たちも既に気づいているだろう。だが、残念なことに『アル』がその要望を優先する限り、何も出来ないはずだ。

健康管理を含め、運用のほとんどは『アル』に一任されている。

俺達人間がやったことは、ストーリーを作り、プログラムを書き、グラフィックをデザインしたこと。

たとえ開発者であろうとも、担当であろうとも、外部の個人の主観をできるだけ除き、また悪用する可能性を除くため、システムに障害を与えない限りは、ユーザーの要望が優先される。

もしもこの状況を外部から打破しようとするのなら、ハッキングをかけるしかない。しかも、すべてを掌握された状態から、眠ることもない相手に。

そう、世界最高峰の人工知能と呼ばれる、『アル』に対してだ。

そして、その『アル』の最後の声が聞こえる。

「では、以上で【Babylon】のチュートリアルを終了いたします。皆様、この仮想現実世界【Babylon】をお楽しみくださいませ。各々の物語を紡ぎ、各々の選択で、この世界の中心である『バベルの塔』最上階にたどり着き、そしてその場所に鎮座する神に挑み打ち倒すことで、再び現実の世界への道が拓けることでしょう。」

……………健闘を、祈ります」

これが、あの時起こった全てだ。

そして、予想外のチュートリアル期間。それが、曲がりなりにも街を落ち着かせ、今俺がこうしてコーヒーと楽しんでいるような理由の一端を担っている。

デスゲームに取り込まれたということ。

そして、すぐには死ねないということ。

落ち着いた人間が思いの外多かったとはいえ、その後すぐ、シヨックから自殺しようとしたプレイヤーもいたらしい。

そして、そのプレイヤーが呆然とした顔で、神殿に再構成されたのが伝わると、騒いでいた人間たちも落ち着いたららしい。

らしい、というのは、俺もアナウンス後の少しの放心の後。

とある事のためにまず街を離れていたからだ。

その過程で色々とあって、今こうしているわけだが。

(そろそろ、来てもいい頃だろうか)

俺が、なかなか現れない相手に思考を移すと、

カランカラン

音と共に店の扉が開き、人影が入ってくる。

俺は、黙ってその人物がこちらに向かってくるのを待った。

四話（後書き）

前回説明ある程度終わりつつ書いたものの、全くそんな事なかったです。すいません。

物語を本格的に始める前に、色々と書かなければいけない理由付けが多いですが、できるだけ読みやすく書いていきたいと思っています。

……プロの作家さん達のようにはいきませんが、何とか搾り出させて頂きますので、生温く見守って頂けたら幸いです。

五話（前書き）

すぐに申し訳ないですが誤字訂正です。

五話

「君がトールさんか、すまない、ギルド内の会議が長引いてしまった。随分と待たせてしまったようだ、謝罪させて欲しい」

そう言つて頭を下げ、俺に声をかけてきたのは、銀の髪をした美丈夫^{じよつぷい}だった。

絵に出てくるような聖騎士のような格好。

その髪によく映える銀の鎧に、腰には長剣を装備している。

その容姿を見て、おそらくあまり造形をいじっていない天然物だと俺は思った。元々ゲーム内には美男美女が多いが、設定かどうかは結構分かるものだ。

こんな所でそんな能力が役に立つとは思わなかったが……

ちよつとした行動の立ち居振る舞いも堂に入っている。

男の俺から見てもそう思うのだから、さぞかしおモテになることだろう。

そんな羨む外見で、態度が傲慢であれば即座に敵認定している所だが、その低姿勢には好感を持てる。

「いや、問題ないさ、近頃ずっと動いていたから、この時間のコーヒータイムも悪くない。後、『トール』でいいから。さん付けされる^{さんづけ}とむず痒いんだ」

謝罪の言葉にそう首を振り、俺は対面の席を促しマスターを呼ん

だ。

「……いや、私は」

「いいから、このコーヒーは格別うまいんだ。謝罪に免じて、奢りにしとくから飲んでみてくれよ。実は、先日あんたらに買い取ってもらった情報のお陰で裕福なんだ」

そう遠慮しようとする男に、俺はニヤツと笑いかけ、コーヒーを自分の分も含め二杯頼む。

このプレイヤーの名は俺でも知っている。

あのアナウンスの後、混乱しているユーザー達をまとめ、MMO経験の豊富なユーザーに声をかけ、情報を共有する互助ギルドを立ち上げた男だ。

その容姿と類まれなるキャプテンシーであつという間に【Babylon】一大ギルドの長となったこの銀麗の剣士を知らないものはいないだろう。

一言で言うなれば、……言いたくはないが、俺とは真逆のタイプの人間だ。

リアルリアルヴァーチャルヴァーチャル現実でも仮想現実でも、人をまとめてしまうような。きつと性質の一つには『主役』とか書いてあるに違いない。

そんな俺の内心には気づかず、目の前の男は対面の椅子に腰掛け、口を開いた。

「ご厚意に甘えてありがたくいただくことにする。……改めて自己紹介をさせて頂こう、私の名は『フェイル』。ギルド『銀の騎士団』のギルドマスターをやらせていただいている」

「知ってるよ、あんたは有名だからね。で？ そんなギルドマス

ターさんが、ソロ狩りをやっているようなただの中級プレイヤーの俺なんかは何の用だい？」

「……………ただの、とはご謙遜だな。端的に言おう、君の情報収集能力が欲しい。君が開示したモンスターの情報、ダンジョンの情報是非常に精確だったよ、うちの補佐も驚いていた。銀の騎士団に入らないか、トール」

俺の疑問に、少しの逡巡の後そう言ったフェイルの言葉に、俺は首を振る。

「随分と過剰評価をしていただいてすまないが、生憎と、どこにも所属する気はない。これは別に銀の騎士団がどうこの問題じゃない」

「何故だ？ 理由を、聞かせてはもらえるか？」

「そんなに大げさな理由じゃないさ。昔、もちろんこのことは違うMMOでだけけど、アイテム関係でよく揉めてな、それ以来、ソロ活動が多いんだ。……………今更、集団行動が出来るとは思えないしソロのほう効率がいい。おかげで情報収集も得意になっただしね」

誰であれMMORPGの経験があるものならば、手に入れたアイテムの分配等で揉めた経験は少なり大なりあるだろう。だからといって極端にソロプレイに走る人間は多くはないが、決して少なくもないのだ。

「しかし……………」

ただ、今の状況ではそれだけでは断る理由には弱いのだろう、その俺の言葉に何かを言いかけるフェイル。

確かに、この状況では情報共有は必須だと俺も思っている。
なので俺は先手を打つことにする。」

「もちろん、何もしないって言うわけじゃないぜ。もちろんボス戦には協力するし、俺が確認したモンスターの情報やダンジョンの情報は即座に公開するつもりだ。先日みたいに『言霊』関係の情報があれば、知らせるさ。人の命をかけてまで、情報を独占する気もそれを商売にする気もないよ。」

今回情報料を頂いたのは、あんたのところの綺麗なお姉さんに借りを作りたくないと言われたからさ」

俺がそう言うと、フェイルは少し難しそうな顔をして、黙った。

本当にギルドに属さない理由はそれだけでも無いが、嘘は言っていない。

それに元々、こういう状況でなくともソロ経験が俺は多い。

先ほどのような理由もあるが、一番は仕事柄時間が不定期だからだ、いつ入れるかも落ちるかもわからないのならば、一人のほうがいい。

大体的なイベントがある場合には、臨時パーティを組めばいいだけの話だしな。

………決して、大人数での人付き合いが苦手だからなわけじゃないぞ？

「………後二週間だが、それでも可か？」
少しの沈黙の後、カップを傾けてコーヒーを一口飲み、フェイルはそう呟いた。

俺はそれを聞いて、ああ、良いやつなんだと思う。てつきり、俺が情報を独占することについて考えているのかと思っただが、違っただらしい。

二週間後、その時何があるかなんていうことは言うまでもない。チュートリアル期間の終わりが示すもの。

それは、塔の最上部に到達し、この世界が攻略されるまで終わらない、死の遊戯デスゲームの始まり。

フェイルが、俺に真っ直ぐな視線を向けてくる。そこには迷いも打算も感じられない。

この眼の前にいる男は、おそらく本当に善人なのだろう。今日初めて出会った俺のことまで気にかけてようとしている。

ある意味何でもありになってしまったこの状況で、他人の心配が出来るのは皮肉などではなく、尊敬に値する。

それが分かったからこそ、俺ははつきりと否定する意味で、頷いた。

多分、その場所に俺はいないほうがいい。

俺が、いられない。

今はまだ、死人が出ていないからいいだろう。

しかし、現実問題、今この世界に生きている15000人が誰一人欠けずにクリアできる可能性など、限りなくゼロに近い。何せ、1000人で行ったクローズドの時でさえ、どれだけ『死亡』数があったかなどわからないのだから。

これは、当たり前のことではあるのだ。
何度も死に、そのたびに学習する。
それが本来のゲームのあり方なのだから。

しかし始まってしまった現在の【Babyion】はそうではなくなる。

そして、実際その時を迎えてしまった時、きっと運営への文句は出るはずだ。

……『アル』への呪詛が、出るはずだ。

むしろ、毒づかない奴なんていないだろう。

この世界を創り上げることに携わり、『アル』と面識のある俺でさえそうなのだから。

例えばそれを間近で聞いた時、もしくは所属しているギルドのメンバーが死んだ時。

俺は、それに耐えられる自信がない。

現実世界における、運用メンバーの一人であったものとして、この創作者の一員としての覚悟が、俺には足りていない。

この二週間。俺はひたすらモンスターの情報と自分の知識のすり合わせを行っていた。

出来るだけ正確に、先入観の混ざらないように。

AIの行動パターン、出現率、注意すべきことを知識の限り。

効率を求めて一人で出現パターンの合間を縫い、必死に自分の作ったアルゴリズムを思い出し、短期間で調べられるだけ調べた後で公開した。

もちろん他のプレイヤーが既に公開しているものは省き、俺でしか気づかないようなことであつたり、レアなモンスターであつたりの情報を少しずつ公開していった。

正直、二週間はあつという間だつた。

寝る間も惜しんでいたから、結果的にレベルも上がっていった。

……そして、二回死んだ。

自分で作ったものながら、モンスターは本当にリアルだ、攻撃されることの恐怖もあるし、始めはたとえ相手が雑魚であるとわかつていたとしても、体の反応は逃げると叫んでいた。

しかし、無理出来る期間が限られているからには無理するしか無い。

この期間が終わっても、命がかかってもお、俺がその恐怖に打ち勝てるかどうか等、正直自信がないからだ。

俺には、批判や罵声を受ける覚悟もなく、開発メンバーであることを明かす勇気はない。

俺の持つ情報は、雑魚モンスターの基本パラメータと行動パターン、他のメンバーが担当していた部分のうる覚えの知識。

ダンジョンや『言霊』の配置や出現はランダム関数を用いているから正直わからないし、自分がゲームの時に楽しむために、必要最小限な情報以外からは敢えて離れていたことが悔やまれるが、知りうる情報はすべて公開していくつもりだ。

そんな俺の内心がわかるはずもないが、表情を見て誘いが無理なことは察したのだろう、フェイルは諦めたように笑った。

こんな時だが、苦笑ってイケメンがやると確かに似合うな……、等とらちもないことを考える。

「困ったら、いつでも言ってくれ。我が銀の騎士団シルバース・ナイトはどんな時であろうと入団希望者を歓迎するし、この状況だ、ギルド団員であるうとなかろうと、助け合わなければと思っている。

後、このコーヒーは確かにうまいな、ギルドを立ち上げて、重圧もあつたが、久しぶりにそんな事を思った気がするよ。トール、礼を言わせてもらう。よければ、友人として、これからもよろしく頼む」

そう言つて、本当に美味そうにコーヒーを飲み干すと、爽やかに笑い、立ち上がり手を差し出してくる。

去り際の握手か…… 本当に、主人公らしい男だ。

しかし、話してみわかる、この銀色の剣士なら、皆の先頭に立つて、この閉じられた世界で人を導くことが出来るかもしれない。

眩しいけれど、主役としての責任と戦おうとしているこの男のようにはいかないだろうが、裏方らしく俺もがんばろうと思える。

「ああ、こちらこそ。お互いに、無事を祈つて」

俺はそう言い、その手を握った。

これからは少しだけ心の焦りに向き合える、そんな気が、していた。

【 Babylon 】 チュートリアル 15 日目
15000 人
現プレイヤー数 :

五話（後書き）

10/20 少しここまでの話を改稿しました。

六話

ダブル・チェイン
「双撃！」

手にした双剣が、相手にヒットする。

俺は、すっかりリンクを引っ掛けてしまったモンスター、『リザードナイト Lv.12』が、生命力（HP）を散らし粒子となつて消えるのを見守つた後、その落としたドロップカード、『龍人の鱗 Lv.3』を拾い上げた。

今更の説明だが、このゲームではアイテムは二つの形状を持つことが出来る。

まずは、普通にオブジェクト化したもの。

ただ、これでは常に持ち運ぶわけにも行かない。

ドラ もんの四次 ポケットでもあれば別だが、それは仕様を決めるときに却下された。

後、戦闘中に使つたりもするので、メニューで選ぶだけでは効率が悪すぎる。

結果、アイテムはカード化して持ち運び出来るようになったわけだ。

モンスターを倒した際も、ドロップカードが落ちる。

これを拾う瞬間は、中々いいものだ。

もちろん乱戦では自動的に収納されるようにもできるが、気づいたら在る、よりも自分で手に入れた感があるので俺はカード化してドロップされるようにしている。

それをアイテムボックスに収納すると、俺は目の前に続く目的地への獣道をみやり、その先に歩を進めていった。

喫茶店でフェイルと別れてからの俺は、不思議と少しだけ肩の荷が下りたような気がしていた。

そばにはいられないなんて思ったけれど、だからこそ、そう思った。

自分でも、勝手だというのはわかるし、現金だな、と思うが。

俺は、元々裏方の人間なわけだ。

昔から、主人公体質のやつが突き進むのに付いて行って、適当に狩り残した枝葉を回収するようなタイプだと自負している。

伊達に俺を25年もやってはいない。

性質にも文字通り『裏方』ってあるしな。……………お願いだから笑い事にしておいてくれ。まだ時々ステータス見て哀しくなったりするから。

それでも、こんな事になって、必死になって情報を集めて、せめてどこかで俺も攻略するのに貢献しないと、なんていうことを、柄にも無く思ってしまったわけだ。

責任がある立場だと思っている割りには、俺の持つ手札は哀しいほどに少ない。

遅かれ早かれ、実力のあるプレイヤーならば解るような知識ばかりだ。

もちろん、今もその責任を感じる気持ちは変わってはいないし、やることはやるつもりでいる。

まだ、俺は開発者です、こんなことになって申し訳ないです、なんて事も言える気はしないけれど。

フェイルのように人を集めて、人を思いやって、俺みたいなソロプレイヤーのことまで気にかけるような、そんな人間がここにいると、実際会ってそう感じるのは、やっぱり少し、暖かくなる気がする。

とまあそういう少しの晴れやかな気持ちの元、俺はログインしてから二週間目にして初めて、元々やるうと思っていたことをしに、いつもと変わらず一人で、だが少し気負いも和らいだ形で、ここに来てきたのだった。

バベルの街西部からでて少し行くと、『深淵の森』というフィールドに突き当たる。

初心者が少し戦えるようになったかな、というレベルで訪れることの出来る、つまりは中級者の入り口の為のレベル上げに最適な場所として設計された所だ。

攻略組、と常から呼ばれているような元・廃プレイヤー達は、これまでの二週間で通り越しているし、

怯えつつも、フェイルのような人間のお陰で少しずつ立ち直り始めた初心者プレイヤーには少し早い、そんな場所。

俺も、ひたすら今開放されているダンジョンをソロで回っていたため、ここには既に来たことがあるし、モンスターの確認も終えて

いる。

ただ、その時の余裕のない俺が、見ていない場所があった。

その場所は、別にレアモンスターが出てくるわけでもない。

決して、良いアイテムが出るわけでもない。

そんな、特にプレイヤーにとって都合の良いわけでもない場所に
行くことと思いついたわけは、今の時間帯にある。

後一時間ほどで日が暮れる。それは明日以降になってしまっただろ
う。

正直、それでも不都合があるわけでもない。

でも、フェイルが立ち去って、コーヒーが美味しいと思って、あ
いつもそう言って。

その場所に、行きたくなった。

自分でもわからないけれどそんな時がある。わかってもらえるだ
ろうか？

街を出て、森に入って20分程、ふと、俺は違和感に気づいた。

(……………追っつけられてる?)

さすがに人が少ない場所だとは言え、誰もいないわけではないか
ら、多かれ少なかれ狩りをしているプレイヤーはいる。

ただ、先程から俺が一直線で進む場所に、一定の距離で付いてくる三人のパーティがいるようだ。

なにせ一番目の性質は『臆病者』な俺。

索敵は任せてくれ。

というかこの能力が意外と使えたお陰で、俺はソロ狩りとしてなかなか効率よくやっていけている。

……この性質を誇りたいかと問われれば、ノーコメントでお願いしたいが。

先ほども言ったが、これから向かう先は中心部でもないし、俺のような目的以外でそこを目指す物好きなどいないだろう。

それに、俺の更なる性質……『裏方』により、できるだけモンスターと遭遇しないよう^{リンク}に行動している俺に離れずついてきているということは、向こうも結構なスピードで進んできているはずだ。

プレイヤー・キラ
(PKか……厄介だな)

この巻き込まれた状況下で、そんなことをしている人間がいるとは信じたくはないが、盲信もできない。大体、この状況でソロで行動している俺をつける理由など、他には思い浮かばない。

三人の相手をするのは相手のレベルによるが分が悪すぎるし、ここであまり時間は食いたくないのもある。

尾行をまくのならば、まだ目的地が見定められていないであろうここしかないだろう。

「しょうがない、隠れてやり過ごすか」

ここで返り討ちにしてやれないのは悔しいが、それこそ顔を覚えてフェイルにでも注意を促しておけばいい。そう考えた俺はそう呟くと、一気に移動のスピードを上げ、そして、ある程度距離が離れたところで、密集した木陰に身を隠した。

元々の俺の職種が盗賊シフなのと、外見が黒髪に黒のコートなのも相まって（裏方のせいだけではないぞ）、相当の索敵サーチスキルがない限り、ここに俺がいることは見破られないはずだ。

そして、それだけの索敵サーチスキルがあるのであれば、レベルも相当のはず。相手に害意があった場合、目的地にたどり着くまでにやられてしまうだろう。

俺の現レベルは24。

入って二週間という期間を考えると結構なレベルに達しているとはいえ、元々がそこまで装甲のない盗賊シフだ。その速度を用いた戦闘で、一対一位ならどうにかなったとしても、多人数相手にどうこうできるはずはない。

人の気配が近づいてくるのを感じる。

俺は、息を潜めて、意味もわからず後を付いてくる不審な輩やから達の顔だけでも確認しようと、木陰から目を凝らした。

（……………えっ！）

そしてその影を視認した時、俺は声を漏らしそうになるのを何と

かこらえる。

追っ尾けてきていたのは、予想通り、三人編成のパーティだった。装備と振る舞いから見て、結構レベルも高そうだ。

戦士職二人に、後衛の魔術師が一人。

回復役はいないが、それだけ余裕のある面子なのであろう。

ただ、俺が驚いたのは、そのレベル等ではない。

その中の一人を、見たことがあり、知っていたからだ。

先頭をやってくる、黒髪の女性。

スレンダーな体型に、冷静さと伶俐さをたたえる目。そしてその美貌に似合いすぎている眼鏡。

これで腰にレイピアを吊り下げ、軽防具を身にまわってなどいなければ、立派な秘書に視えるであろう。

確か、名を『ローザ』と言ったか。

『言霊』の情報を渡しに行った時に見たから間違いない。

俺は、美人の顔を覚えるのは得意なのだ。

それは、先程俺が入団を断ったギルド。

あの主人公然とした善人に見えたフェイルがマスターを務める、シルバース・ナイト銀の騎士団のギルドマスター補佐をやっている人間だった。

六話（後書き）

10/17 Lvを少し調整しました。
本筋には関係ありません。

七話

(……まさか、銀の騎士団の連中が?)

ギルドのマスター補佐がPK?

思いもよらぬ遭遇にそう考えて、俺は混乱する。

つい先程まで、フェイルのような男と、その作るギルドについてのいい印象があったからこそ、余計に思考が乱れていた。

少し躊躇するが、どういうことが確認したいという意味が勝る。

それに、確認するとすれば、チュートリアル期間でいられる今しかない、との冷静な部分もあった。

脳内の迷いとは裏腹に、体は反応する。

音もなく、この二週間で使い慣れた双剣のうちの一本を手にとると、俺は身を潜めていた木陰から飛び出した。通り過ぎかけていた三人は気づくも、まだ構える間はない。

そして、その隙を待っているほど、俺は馬鹿でもない。

狙うのは後方にいた魔術師の男。

「……動くなよ、首への至近距離からの一撃は、ほぼ間違いなくクリティカルだ。防御の薄い魔術師タイプには耐えられないと思うぞ?」

俺に短剣を首筋に付きつけられた男は、それを聞いてコクコクと小さく首を動かした。

それを見て俺も頷くと、このいきなりの状況にも全く動じた様子がない、ローザに目をやる。

「……また会ったな」

「ええ、トールさん。あなたに頂いた情報のお陰で、この世界は初めて塔の一步を登ることができそうです。その節はありがとうございました」

塔の最初の階層を開くための、『言霊』の場所を見つけたかもしれないという情報を持って銀の騎士団に行った時と同じ……本当に嫌になるほど冷静だ。

もしかしたら、こいつは人質としての役に立つ人間じゃなかったか。構わず二人がかりで押し切られたら……

そんな心境を読んだかのように、ローザが言葉を続ける。

「後をつけたことは謝罪します。ですが私達に害意があるわけは有りません、もちろん必要と有らば防衛は致しますが」

そしてあっさり尾行していたことは認め、謝罪と共に腰のレイピアを含み武装を解除してみせる。隣の戦士の男も同様だ。

（随分とあっさりしてやがるな）

その対応を意外に感じながらも、なおも俺は魔術師の男に短剣を突きつけておく。

なににせよ三対一だ、保険はかけておいて損はない。

「……PK目的ではないと？」

「ええ、そんな事をするコフェイルに怒られてしまいます。……」

……ネイルを、魔術師の彼を開放してあげてもらえませんか？」

「それだけで、偶々面識があるだけに過ぎないあんたが信じられると?」

「……そうですね、言い方を変えましょう。あなたを襲って得られるメリットと、あなたの情報の価値の利益計算ができないほど愚かだと、私はそう見られているのでしょうか?」

すごい自信だな、おい。

しかし、傲慢に聞こえるその言葉に、俺は不思議なほど納得してしまった。

……その美貌と目線に気圧けあされたわけじゃないぞ。

「……悪かった、俺の勘違いだったみたいだな」
そういい、捕らえていたネイルと呼ばれた魔術師を解放する。

「まあ、あっさりと捕まったそいつが悪いに30点」
隣の戦士が、ニヤツと笑って呟く。

でかい。190cmを超えているのではなからうか。
体格がいいだけではなく、引き締まっているのが解る。

その隆々とした体の上に乗るのは、灰色の短髪の下にぎよるとした目と鷲鼻わしばなを配置した角張った顔。そして目につくのは二の腕にある大きな龍の刺青。

あの、どこかその筋の御方でしょうか? プレイヤーの皆様、我がVRMMORPG【Babylon】は、万人に開かれております。

そんな俺の一步引いてしまった心境にもかかわらず、男は近づいてきて、バンバンと俺の肩を叩いた。

「いいね、お前。嬢ちゃんが気になるって言うから付いてきたけれど、いい動きするじゃねーか。俺はリュウだ、フェイルの野郎と銀の騎士団の幹部をやってる。つってもまだ入団10日目だけどな。よろしく頼むわ」

そしてガツハツハと豪快に笑う。

肩が痛い、どうやら気に入ってもらえたらしい。うん、結果オーライ。

「ひどいなあ、リュウさん。僕は後衛職なんですから、しっかり守ってくださいよ。これで本当にPK専門の人間相手だったらどうするんですか」

その結果オーライの元はといえば、そのさらっとした金髪をかきあげながら、リュウに文句を言う。

そのリュウとは対称的に細い体格。そしてその容姿は文句なしの美形、西洋系とのハーフの様に見える……見ようによってはフェイルよりも綺麗な顔立ちかもしれない。強面のリュウなどよりもよっぽど騎士団と言った感じがする。

でも、どこか仕草にナルシストさが漂っていて、俺にとってはリュウの方が好印象である。

「でも確かに、今回は僕の負けを認めるよ。ツールさんだったね、僕はネイル、人は轟炎の魔術師、と呼ぶ予定だ」

予定かよ！ しかも二つ名自称ってどんだけ……リュウさんとは違う意味で強者だ。

瞬間的に、俺の中でネイルは残念な二枚目として認定された。異論は認めん。

フェイルのそこは濃いキャラが揃ってるなあ、さすがだ。

とりあえず二人と挨拶を交わした後、ローザに改めて目を向ける。

「で、何で着いてきていたか、話してもらえるんだろう?」

俺がそう問うと、ローザは頷き、少し考えて言った。

「ええ、そのつもりです。ただ、その前に一つお伺いしてもよろしいでしょうか?」

「何だ?」

「……この先には特に何も無いはずなのですが、トルさんはどちらに向かっておられたのですか? 差し支えなければ、教えていただきたいのですが」

なる程ね、それは疑問に思うか。

俺はローザの言葉にそう納得する。

「言うより実際に見せたほうが早いな、隠すもんでもないし。でも、別にアイテムとかそういう実利的なものがあるわけじゃないから、そんな期待はしないでくれよ。そう遠くはないから、そこまで急ぎでもないけれど、歩きながら話そう」

そしてそう言って歩き出す。

後20分もかからないが、この先モンスターには合わないでもないので進んでおきたい。

というか本当にただ付いてきてたんだな。害意はないとすると、何だろう。

ギルドに入らなかったことについてかな。

「わかりました。貴方達はどうしますか？ リュウ、ネイル」

「俺は行くぞ、面白そうだしな」

「僕も今更一人で帰る気はしませんよ」

ローザの確認の言葉に、当たり前のように着いてくると答える二人。

ちっ、美人と二人デートも悪くないのに。

内心で思うと、ローザから一瞬冷たい視線が。

……あれ、心読まれた？ というか追尾けられてたの俺なのに何でこっちが悪者みたいな目で見るの？

コホン。

取り敢えず、そんなやり取りの後で、俺と銀の騎士団の三人という変則パーティーは目的地へと歩を進める事になった。

その後話してもらうと、後をつけていた理由としては、俺のもたらした情報があまりに正確だったので、どのような方法で狩りをしているのか気になったのだという。

そして、ギルド入りを断られたと聞いて、その情報収集の手法を出来れば聞きだそうと探していたところ、街を出る俺を発見、見ていれば、よくわからない方向へと進んでいく。これは何か在るのかと思ひ、三人で着いてきた結果今に至るといっわけらしい。

聞いてみれば、確かに馬鹿馬鹿しいような普通の話だ。

ローザの態度を見てみると、どうもまだそれだけでもなさそうだったが、害意があるわけではないのは確かのようにだったので、放置する。

多分詮索してもわからん。この人感情表に出ないんだもん。

ちなみに、俺が気になって、等のフラグでは残念ながら無いのだけは言っておこう。

彼女はあの美形かつ善人のフェイルのハーレム要員のようで、裏方の俺には付け入る隙もない。

……甲斐性もないがな。

そうして臨時パーティを組んでみると、三人とも、さすがに大ギルドの幹部クラスだけあって高レベルプレイヤーであった。

ローザは小技の連続で敵を足止めし、リュウさんが薙ぎ払う。

残った敵はこれまた残念な二枚目の割に強いネイルが、後方で詠唱を重ねて焼き払う。

うわ、そりゃこのレベルのフィールドでは回復役いらないわ。圧倒的だもの。

もちろん、俺は盗賊らしくそそくさとモンスターからアイテムを盗んでいましたが何か？

そんなふうに順調に目的地に近づく俺達。

まあ、近いのは俺にしかわかつてはいなかったが。

そんな時だった。

森の中に声が響き渡る。あまり現実では出会わない声。

「悲鳴？」

「……だな、多分こつちだ、100m程先にプレイヤーが三人。モンスターの気配……無し。これは本当にPKかもしれん」

ローザの疑問に、俺はそう答えて走りだす。遅れて三人も続くが、

本気で走る盗賊シーフの俺よりは遅い、何せ全基本職種中最速なのが盗賊の特徴だ。もっともそこまで遠くはない、すぐ追いついてきてくれるだろう。

悲鳴の声は女の人の声だった。……それも、相当切羽詰まったよ
うな。

嫌な予感が脳裏をよぎる。

俺は、自分に出せる限りのスピードで、声の方向へと向かった。

七話（後書き）

ご覧になって頂いてありがとうございます。
この後につなげるため、締め部分を少し修正しました。

八話

本当に、嫌な予感ばかりが当たることだ。

走り抜けた先では、ある意味ではPK以上に忌避されるような事が起ころうとしていた。

その目の前の光景を見て、即座に意味を悟った俺は、ずっと頭が冷えるのを感じた。

正直、内心ではわかっていたのだ。

『アル』は、この世界を、もう一つの世界と呼んだ。

ここは、仮想ではあるが、現実だと。

元々、今回が初の試みとなるVRMMOには、大きな懸念もあった。

それは、これまでは画面内の話であった暴力やハラスメント行為が、実際に行動としてできてしまうということ。

だからこそ、それを行ったことに対する黄色マーカー等があるし、様々な倫理コードでの対処等が存在する。

ただ、それは運営が機能していることが前提の対策であったりもする。

『アル』という、この世界での神とも呼べる能力が前提である、対応策。

しかし、『アル』はあのアナウンス以来、姿を見せていない。

そして、次は、この世界を現実とするための、最終アナウンスだとも言っていた。

それは、現在、運営という名の絶対的立場からの監督が存在しな

いことを意味する。

『アル』にとっては、犯罪者も、被害者も、等しくプレイヤーに過ぎないのだ。

システム上不都合となる場合には別だろうが、仕様上影響を及ぼさないものに対しては、何も行動は起こさない。

そして、この世界には、法律というものは存在しない。

『死亡』に気を取られて、それ以外にも、どれだけ薄氷を踏むバランスのもとに成り立っているものがあるかということにまで、考えが及んでいなかった。

……いや、それは嘘だ。

考えることを放棄していたのだ。

ここは、この世界は、現実だ。

ただ、『死』だけがそうなるわけではない。
生活するということ全てが、現実なのだ。

俺の索敵サーチにかかっていた人数は三人。

だが、ここには四人いた。

男性プレイヤーが三人、女性プレイヤーが一人。

男のうちの一人が呪術師らしく、女性プレイヤーに麻痺パラライズの呪文をかけて動けなくした上で、残りの二人が押さえつけている。
その座標がかぶっていたからこそ、三人だと思ったのだ。
一人の頭上に黄色のフラグが出てはいるが、気にした様子は見られない。

男達が突然の闖入者である俺の方に顔を向ける。その顔に浮かんでいるのは、醜悪で下卑た笑み。

そして、その背後で麻痺の呪文をかけ続けている呪術師の男と目が合う。

っ！

それを見た時、俺の中で何かが弾けた。

瞬間、俺は投げナイフのカードをオブジェクト化し、その呪術師に向けて投擲。そのまま女性プレイヤーを組み伏せている男達に向かってその双剣からの一撃を放った。

三対一だということも、後から来るローザたちの事も、頭から消し飛んでいた。

虚しくナイフは避けられ、俺の双剣もまた、空を切る。

しかし、その行動によって組み伏せられていた彼女は解放された。即座に、俺はその女性を背後にかばうようにして双剣を構える。

飛び退いて避けた二人は、片方は戦士のようだった、背中に担いだ剣を抜き、威嚇するように構えてくる。

そして、もう一人が何事かを呟いた瞬間、俺の動きを絡めようと地面から茨が伸びてくる。

ローズ・バインド
束縛の薔薇。

咄嗟にそこから飛び退くも、俺はその攻撃により判明した相手の職種に驚愕する。

(なっ！ ……もう一人も、呪術師だと！)

呪術師は、相手の行動を阻害したり、パラメーターを低下させたりすることの専門家だ。エキスパートその効果は多彩なものがある代わりに、攻撃力は低い。しかも、モンスターによっては妨害が効きにくい相手も存在する。

壁役の戦士と攻撃力の低い呪術師二人などというパーティは、歪いびつもいい所だ。

明らかに、モンスターを狩る面子ではない。

……一人のプレイヤーを、嫩なぶりながら狩るための、三人だ。

おそらく、交互に麻痺パラライズをかけ続けるつもりだったのか。

その考えに行き付き、吐き気がする。

思考が、得体のしれない憎悪と嫌悪感に飲み込まれる。

「……………っ」

しかし、その感情に身を任せて斬りかかろうとしたその時、背後の、麻痺から解放され起き上がるうとしていた女性から漏れた声に、沸騰しかけていた俺の頭が少し冷える。

そつだ、今は守らねばならない。この背後の女性を。

「……………すまない。あんたを、助けるから」

そつ小声で告げ、さらに攻撃を加えてこようと身構える眼前の男達を見据え、片手を上げて口を開いた。

「待てよ……お前ら、正気か？ 三対一で女を襲うとか……状況わかってんのか」

そして、背後の女性の手をとって何とか立ち上がらせ、後退りする。

「へっ、何だよお前。正義の味方気取りで飛び込んできたわりにはもうビビッてんのかよ、ああ？ わかってねーのはお前のほうだ。こんな訳の解らん状態で、一度も死なずにクリアだ？ 出来るわけがねえじゃねーか、俺たちは死ぬんだよ！ なら、それまで楽しませてもらって何が悪い」

そんな弱腰な俺を見て、戦士の男が構えたまま、俺を嘲笑つかのように笑みを浮かべ言ってくる。

「……なんなら、お前もどうだよ。俺らの後で良ければ混ぜてやるぜ？ 見るよ、そいつはきつと極上だぞ」

そして、それに追従したかのように、一緒になって取り押さえていた呪術師の男が、詠唱を中断し、嘲笑った。

その言葉に、掴んだ腕ごしに女性がビクツと強張るのが解る。

うちの先輩達は本当に優秀だ。

……綺麗なものだけでなく、こんな醜悪な表情まで完全に表現しきれているのだから。

せめて少しでも安心させられるように、掴んだ女性の腕に少しだけ力を込めて、そして嘲笑する男にむけて俺は憎々しげに本心を吐き捨てる。

「クソ食らえ、って言葉を初めて自然に使うよ。下種^{げす}が」

挑発するような言葉に、二人が激昂する中、たった一人無言でいた残りの呪術師が、急に背後を振り向く。

チツ、バレたか。

「……………む……………三人。仲間か？ 分が悪いな」

目を細めそう言い、すっ、と手を地に広げ、転移の呪文を用意しようとする。

こいつだけは他の二人とは違う。挑発にも乗らずに決断が早い、このまま逃げるつもりのようなようだ。

少し頭が冷えた結果、俺の後を追って近づいて来ているローザ達の気配に気づき、何とか時間を稼ごうとしていた俺だったが、仕方がない。こちらもやられてしまうかもしれないが、誰か一人でも倒せば、その相手の情報は得られる。

今は、名もわからぬまま逃がす訳にはいかない。

【B a b y l o n】は広く、運営はいない。
ここで逃すと捕らえるのは難しくなるだろう。

後は、ローザ達が何とかしてくれるだろうと考え、相打ち覚悟でも二人は道連れにしてやると決める。

「下がってて、もうすぐ助けが来るから」

そして、そう言って掴んでいた手を放すと、その空いた手を改めて掴む感触があった。

「……………待つて下さい。10秒だけ、三人を同時に足止めって、で

きますか？」

その後が続く思いも寄らない言葉に、俺は咄嗟に振り向く。

……………初めてきちんと顔を見たが、息を呑むほど綺麗な、意思の強い目をしている。

そんな彼女の、肩を震わせながらも俺を見る目線はまっすぐだった。その手を振りほどけない程に。

俺は、余裕が無い中で考える。

三人同時では長くは保たないが、倒すことを考えず時間を稼ぐだけなら出来なくもない。それに今ならば、一番注意が必要そうな呪術師の一人は、どこかに転移する準備に追われているはず……………
そう判断した俺は、しかし、一応最後の確認を取る。

「……………できたら逃げて欲しいんだけど」

その言葉には、案の定首を振られた。

怖くないわけがないだろう。本当の心の中などわからないし、事情も知らない。

それでも、彼女が逃げることも守られることもよしとせず、戦おうとしていることは分かった。

だから、頷く。

「任せた」

それだけ言うと、俺は行動を開始した。

コートのポケットからアイテムカードを取り出し、転移の陣を構成する呪術師とそこに集まる二人の頭上に投げ上げる。

最も、これはただのフェイクだ。

しかしその意味ありげな行動に三人の目線が集まった所で、持ち

うる技能スキルのうち、最速の攻撃を俺は発動させた。

『時雨の舞い』

DEX（器用）とAGI（敏捷）が一定の値に達したプレイヤーが、あるイベントをこなすことで習得できる。

先日、仕様通り取得できたことを確認し、技能イベントを公開したばかりの、おそらく現段階では俺にしか使えない特殊技能。

俺の発した言葉がシステムの流れに乗る。この流れに逆らってはいけない、逆らえば、脳と行動の差異に、行動が中止してしまう。

そして、無事双剣が攻撃の初期動作に入り攻撃を開始した。攻撃によるHPはほとんど減らないが、三人はただ防ぐしか無い。この技は攻撃力は無いに等しいが、複数の相手に攻撃できる上、防御に時間をとらせられる、後衛が詠唱することを見越した時間稼ぎスキルの技だ。

そんな双剣の乱舞に身を任せる俺の耳に、歌が聞こえる。攻撃の中でも不思議と響く、透き通った綺麗な声。

『彼方かなたへ捧ささぐ、風かぜの詠うた』

『想念せんのんのままに、奏かなでましよう』

『虚空そらに揺蕩たゆたう、言霊ことばたま』

そんな歌が流れる中、俺の技能スキルが終わり、その反動である硬直時間間が俺を襲う。

それを見て、憤怒に顔を歪めた戦士の男が防御の体勢を解きその剣を振りかぶるが、俺には不思議と恐怖はない。

（綺麗な声だ……そうか、吟遊詩人だったんだな）

そんな場違いなことすら考える余裕が、何故かあった。

そして、振りかぶった剣が振り下ろされる前に、歌が終わりを告げる。

戦士の背後で転移準備をしていた呪術師が顔をゆがめるが、もう遅い。

『永遠とわの終わりを、告つげましょう』

『シルフ・ディマイス
終焉シユンの蒼風』

最後の詠唱と共に、その技が発動する。

吟遊詩人は、基本的に支援系に優れた職種である。

フィールド等にある言霊ことばを使い、謳うたい、パーティ全体の防御力を上げたり、仲間に攻撃している相手の動きを止めたりといったことが専門だ。

ただ、この【B a b y l o n】ではそれだけではない。

その詠唱に時間がかかるものの、自分の属性に関する歌では、後方からの攻撃系である魔術師よりも威力を発揮できる場合がある。

彼女の歌は、開発者の俺ですら初めて聞くほど、綺麗なものだった。

そして、その効果も。

「……これは、何？」

ようやく追いついてきたローザが呆然と呟き、それに少し遅れて現れるリュウとネイルも絶句する。

その様子も無理は無い。

何せ、未だ先ほどの三人を取り巻いている竜巻は、その終わりを告げる事なく、目の前でその威力をまざまざと発揮してくれているのだから。中に取り込まれば、抜け出すことは不可能だろう。

そして、俺の様子で声をかけてきたのが味方だと悟ったのか、糸が切れたように隣でふらりとよるめくそれを引き起こした女性。

俺は慌ててその身を支える。

フワツ、と顔にかかった髪から、柔らかい良い香りが漂う。

「う、うめんなさい」

そう慌てていう彼女を何とか支えて、体勢を立て直すと、風が止

んでいるのに気づく。

後には、瀕死で気絶状態スタンに陥っている三人の男。

恐ろしいことに、ぎりぎりまでHPを残して気絶状態まで追加するらしい。

さすがにこんな犯罪に走ったプレイヤーを野放しにするわけにも
いかない。

当分三人が起きそうにないのを見て、俺は、とりあえず状況を把握していないローザ達に事情を話すのだった。

八話（後書き）

仕事から帰るとPVが100000を超えてました。

正直こんなにご覧になって頂けていると思ってなかったのびっくりです。本当に感謝です。

後回しにしていたこれまでのもの見直しと改稿をして見ました。

ではまた機会がありましたら。よろしくお願い致します。

九話

眼の前の三人を見て、俺は呟いた。

「さて、どうするか」

事情を理解したローザ達 説明を終えた後の、リュウとネイルの激昂も結構なものだったが、それよりも、普段より更に冷たくなったローザの視線と雰囲気のほうが怖かった と俺は、取り敢えず装備を解除させ、『監獄の檻』という犯罪者プレイヤー用のアイテムで動きを封じた上で、その処遇について話していた。

今ネイルが、ローザに言われて団長のフェイルにフレンドメッセージ（ゲーム内でのメールのようなもの、連絡をとる際に使用できる）を飛ばして連絡をとっているらしい。

するとローザが不意に俺の隣にいた、襲われていた女性に目を向け、口を開く。

「初めまして、私はローザ、ギルド、銀の騎士団に所属しています。あちらの二人も同じ所属です。剣士の方がリュウ、魔術師がネイルです。失礼ですが、貴方のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ……すみません。私、助けていただいたのにお礼もまだで

私は、さ……あ、じゃなくて、トウレーネ、です。えっと、

職業は吟遊詩人です。このたびは、危ないところを助けに来ていただいて、本当にありがとうございました」

彼女が、そう言って深々と頭を下げる。

トウレーネ、か。そういえば俺も説明や後始末を先にして、自己紹介すらしていなかった。

咄嗟に言いかけたのは、現実での名前だろう。もしかすると、MORPG自体、そこまで詳しくはないのかもしれない。

そういえば不思議だ。

ここから出られなくなって、曲がりなりにも生活しているのに、俺も、他の人間も、このアバター名で通っていて、それを疑問に思ったことはなかった。

まだ、ここにいることを現実とは認められていない、ということなのだろうか。

「私たちは何もできていません。お礼なら、その方に」

俺が、トウレーネの言葉にそんな事を考えていると、ローザがこちらを指さして告げる。

その言葉に、俺の方を見るトウレーネ。

「あ……あの、ありがとうございます。えっと……」

そして、お礼をいって口ごもる。そういえばまだ名乗っていないかった。

「トールだ。……いや、そんなにかしこまらなくていいよ。結果的にあいつらを捕らえたのはあんただからな。綺麗な、歌だった」

そう自己紹介をして、思っていたことを告げる。

「ありがとうございます。これだけは、私の取り柄だからトールさんも、助けてくれた時凄いかっこよかったです。」

その言葉に、につこりと微笑んでそんな事を言うトウレーネ。すこし頬が赤らんでいるのが超絶的に可愛い。

……やばい、こつこつ直球派は苦手だ。

先ほどは混乱で、その意思の強い目しか印象に残っていなかったが、初めて、真正面からゆっくりと彼女を見る。

背はローザと同じ位、俺の肩に目の位置が来るほどだから、160cmは無い程度だろう。

ライトブラウンの大きな瞳に、淡く赤みがかった茶色の髪が似合っている。

ローザと同じく美人なのだが、雰囲気とあいまってそこに佇む様には、可憐、という形容詞が浮かぶ。

バーチャル 仮想現実、リアル 現実を問わず、俺には縁がないような人種だ。

それにしても、フェイルにあつてから、美形に大勢出会う日なにとだ。

「生まれて初めてそんな事を言われるのがこんな状態とはね。で？ あんたはあれをどうしたい？」

俺はそう肩をすくめて言うと、アイテムの中でおとなしくしている（というか身動きはできないのだが……）三人に目を向けた。

言葉が少し邪険になったのは仕方がない。その裏技的な知識でこの二週間は前線にいるものの、基本性能モブキャラ（またの名を村人一号）を自負する俺の防衛本能がそうさせる。

その容姿で、裏方性質の俺にそんな直球で褒めてきくるとは、俺がうっかり惚れてしまったらどうするんだ。

……そしてローザさん、こんな時だけ伶俐なお顔を優しく向けるのはやめてください。面白そうなものを見る表情もやめてください。

「……どうしましょう。本当なら警察とかのはずですけど、こういう場合はどうするのですか？」

トウレーネは、少し嫌悪感を目に浮かべそちらを見た後、俺に視線を戻しそう言う。

(しまった、俺の馬鹿野郎。少し落ち着いてきたのに思い出させてどうする……)

自分の気の利かなさに後悔しつつも、ローザ達を見て俺は尋ねる。

「本来なら、こういうのは運営者側でアカウントを削除するものなんだが、今回は期待できない。銀の騎士団で引き取ってもらえないだろうか？」

「ええ、そのつもりです。その件で今団長に連絡をとっているのですが……」

ローザは俺の言葉に頷き、そしてネイルの方を見、それを受けてネイルが答えた。

「はい、今連絡が取れました。そういうプレイヤー用に場所を用意して受け入れるから、転移させてくれ、ということだそうですね。僕も説明のため、一緒に戻ります」

さすがに早い対応だ、頼りになる。

そう思った俺は頭を下げ、頼む。

「すまないな、面倒事を押し付けて」

「いいえ、………では、その代わりに、私どもへこれから先も協力いただけるということでチャラ、ということにいたしましたよ」
首を振った後、少し考えた後ローザはそういった。

「……元からそのつもりだったけれどさ、あくまで交換条件みたいに言うんだな」

俺がそう言い笑うと、

「それは当たり前だと思います。……犯罪者の男三匹と、見目麗しい歌姫。少々差がありすぎるとは思いませんか」

あれ？ さらつと言ったけれど、何か単位おかしくね？

まあいいか、きっとローザさんは怒らせてはいけない御人だ。

そう思った俺は、華麗にスルーしてもう一つの懸念を話す。

「……こちらの歌姫も、保護してあげたほうがいいと思うんだが」

「もちろん、お望みとあらばいつでも御受け入れは致しますが…

…」

「いや、そりゃギルドに入ったほうがいいだろう」

少し言葉を濁したローザに、俺は言った。

「フェイル様の直々の誘いを断った方のセリフとは思えませんね

……それに」

「それに……？」

「そちらは、銀の騎士団に入らなくとも、もう他に騎士ナイトの方がいらっしゃるようですので」

そのローザのいたずらっぽい笑みと、それまでの話を黙って聞きながらじつと俺の方を見つめてくるトゥレーネを見比べて、俺は頭をかく。

だから、俺は騎士でもなく（むしろ盗賊だし）、一般モラ人なんだって……

そんな俺を見て、さらに可笑しそうに笑うローザ。

お、この人が笑うところ初めて見た、レアだな。笑われてるのは俺だけど……

「……………何だよ？」

「……………いえ……………お言葉ですがわびしい人生を歩んでらっしゃったのですね」

やかましい、勝手に人の心を読んで同情するな。

しかも決め付けるな。

……………ええ、そりゃ、こんな美人になつかれた経験は皆無だよ。

って、リュウさんまでニヤニヤしてるし、あなたが静かに笑うのは怖いって、旦那。

「あの、ツールさんはギルドの人ではないんですか？ だったら私も……………まだ、お礼も全然できていませんし、それに、私戦いとかに慣れていないんで、厚かましいですけど教えて欲しいというか……………」

そして、トゥレーネが空気を読んでか読まずか止めをさしてくる。

……………ああもう、わかったよ。覚悟決めればいいんだらう？

「わかったよ、あんなことがあった後、一人で放り出すわけにもいかないしな、とりあえずトゥレーネはさっきのを見るかぎり戦力になりそうだし。自分の戦い方を覚えて、身を守るようになるま

では手伝ってもらおう。フレンドリストの登録、わかるか？」

俺は半ばヤケにそう言って、自分をメッセージでいつでも呼び出せるよう、トゥレーネをリストに登録し、パーティに迎え入れる。

……………だから、そんな嬉しそうに笑わないでほしい、耐性無いんだってば。

その様子を見て、三人を転送させたネイルまで、こちらを見て笑っている。

お前は笑うな、残念な二枚目のくせに。

「……………では、名残惜しいが僕は戻るよ。皆はどうするんだい？」

そんな声が聞こえたわけでもあるまいが、ネイルが俺達に向かってそう聞いてくる。

「そういえば、そうだったか、いい時間ではあるな」
俺は当初の目的を思い出し、そう呟く。

そして、トゥレーネ達を見て言った。

「トゥレーネ、パーティ結成の記念だ、いいものを見せてあげよう。お二人は、どうする、すぐそこだしせっかくだ、来るか？」

「私達がいて、お邪魔じゃないのかしら？」

……………だから、もういぢめないで下さい。

少し悲しい顔をした俺の肩を、リュウが叩いて言う。

「男ならしゃんとしろ、しゃんと……………で？ どこにいきたい

んだ？」

心強い、らしい言葉と、行く気満々な言葉が帰ってきた。まだこの方がいい。

「こつちだ。もう近いはずだから」

何故こうなった。俺はそんな事を思いながら、ようやく目的地に向けて本格的に足を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5889x/>

Babylon ~ 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って ~

2011年10月21日02時01分発行